

惜別

近代日本の歩みを、民衆の視点で掘り起こした。
若き日の戦争の記憶が根底にあった。昨半夏、山梨県北杜市の自宅で、私に克明に語った。千葉県に生まれ、大学入学の翌年、海軍へ。陰湿な暴力。部下を特攻隊に送った罪の意識。爆撃に遭って身に染みた生の不確かさ。中国での日本兵の奮行を聞き苦悩した少年時代。日本社会の家長主義や他民族への差別意識は「変わっていない」という指摘が心に響いた。
戦後、自由民権運動を研究し、1964年に「明治精神史」を著した。国家や政治家ではなく普通の人々にこだわる意図を、75年の「ある昭和史」で説明している。「黙々と社会の底辺に生きた常民的な人びとを通して、一時代の歴史を書く（略）血の通った歴史を再発見

歴史家

色川 大吉 さん
いろかわ だいきち

民の視点で記した近代日本



インタビューに応じ、軍隊での経験を語る色川大吉さん＝2020年8月3日、山梨県北杜市

長、清水英雄さん(81)は「2人は民衆という視点が共通していた」と語る。
80、94年に反戦・平和の市民団体「日本はこれでいいのかわかぬ」の共同代表を担った。事務局にいた元群馬県議、角倉邦良さん(61)は「民衆運動を基盤に世直しをする意志を強く持っていた。温厚そうに見えて激しい人でした」。東京で声を上げ、各地で市民運動に携わる人々を勇気づける。そんな役割を若者たちに促したという。
討論番組「朝まで生テレビ」で90年代、自衛隊の海外派遣や天皇制への反対を説いた。司会の田原総一朗さん(87)は「あの番組にタブーはないが、下手をすると暗殺される可能性もある。色川さんも僕も覚悟していた」と明かす。
沖縄や水俣にも向き合った。昨年出した「不知火海民衆史」は自費出版だった。琉球新報社の編集局長を務めた三木健さん(81)は「目線の低さに県民が共鳴した」と振り返る。
今年9月、三木さんは、過去の論考と地元の声を「沖縄と色川大吉」という本に編んだ。山梨を訪ね、ベッドに横たわる本人に「本ができました。沖縄から来た三木ですよ」と語りかけると、閉じたままのまぶたのあたりがかすかに動き、首を縦に振ったという。発行日は翌日。見届けたように、その朝、息を引き取った。
(佐藤純)

9月7日死去(老衰) 96歳